



サクラ

62編は **ダビデの詩、賛歌** です。指揮者によって、エドトンに合わせてと端書きにあります。エドトンとはダビデが選んだ神殿の奉仕者で、先見者、詠唱者の一人です。彼（祭司ツァドク）らと共にヘマン、エドトン、更にほかの選ばれ、指名された者たちがいた。「主の慈しみはとこしえに」と主に感謝するためであった。(歴代16:41) 彼らが選ばれたのはペリシテ人に奪われ、返還されたものの、災いが続いたため、約50年間ほど都を離れた場所に置かれたままになっていた「契約の箱」をエルサレムに迎える時のためでした。エドトンの子らは礼拝において、豎琴、琴、シンバル、ラッ

パなどの楽器を奏で、詠唱したと記されています。

62編の冒頭に、**わたしの魂は沈黙して、ただ神に向かう。神にわたしの救いはある。(62:2)** と、詩人が祈りの言葉を叫ばずに、沈黙の姿で立っていると言います。願望、訴え、主張、弁明など、言わずにいられないことがあっても、そういう思いを断ち切って、沈黙し、魂を静め、神の声にのみ集中する、と詩人は言います。主イエスが総督ピラトの前で沈黙を守ったことを思い起こします。その時に **神こそ、わたしの岩、わたしの救い、砦の塔。わたしは決して動揺しない。(62:3)** と、詩人は揺るがない平安を得ると言います。耳を塞ごうとしても、騒々しく聞こえてくるものがあります。それは人間の声です。

**お前たちはいつまで人に襲いかかるのか。亡きものにしようとして一団となり／人を倒れる壁、崩れる石垣とし、人が身を起こせば、押し倒そうと謀る。常に欺こうとして／口先で祝福し、腹の底で呪う。(62:4)**

人の子らは空しいもの。人の子らは欺くもの。共に秤にかけても、息よりも軽い。暴力に依存するな。搾取を空しく誇るな。力が力を生むことに心を奪われるな。(62:10) 力を頼みとする人間の世界は、人を倒し、欺き、裏腹で、暴力に満ち、空疎な誇りしかない。人の子らは空しいもの。(62:10) と、詩人は **なんというむなしさ、すべては空しい(コヘ1:2)** というコヘレトの言葉をここで言っているかのようです。

沈黙する時に、聞こえてくる小さな、静かな声があります。 **ひとつのことを神は語り／ふたつのことをわたしは聞いた／力は神のものであり／慈しみは、わたしの主よ、あなたのものである、と。(62:12)** 神はひとつのことを語り、詩人はふたつのことを聞いたとは不思議ですが、ひとつは「神は力であり慈しみである」という、主イエスが最も大切な教えとして答えられた「主を愛し、隣人に仕えよ」と等しいものと私は思うのです。詩人は神の声に **ひとりひとりに、その業に従って／あなたは人間に報いをお与えになる、と。(62:13)** と、救い、希望が与えられると応答し、これを二つ目として聞いたと信じます。コヘレトの言葉、 **神を畏れ、その戒めを守れ。これこそ、人間のすべて。(コヘ12:13)** が、聞こえてくるようです。

『讚美歌21』は、136「わが魂 黙して」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2012-12-02> を取り入れています。この讚美歌は1592年のイギリス国教会の詩編歌集に採用された曲です。

ジュネーブ詩編歌は静かでドラマテックな演奏で、ルネサンス・ギターの色も魅力的です。

[Psalm 62 Genevan Psalter - setting by Claude Goudimel viols and renaissance guitar - YouTube](#)